東京大學

東洋文化研究所

要覽　平成2年度

東京大学東洋文化研究所
6413042778

INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE

UNIVERSITY OF TOKYO

1990

C3
45
11

東洋文化研究所要覧

目　次

Ⅰ　沿革 …… 1
Ⅱ　組織，歴代所長，名誉教授，歴代事務長 …… 3
Ⅲ　職　員 …… 5
Ⅳ　研究活動 …… 9
　A　部門研究 …… 9
　B　平成元年・2年度研究計画 …… 22
　C　定例研究会 …… 47
　D　科学研究費・特別事業費による研究 …… 56
　E　本学内教育参加 …… 61
　F　外国出張 …… 68
　G　外国人研究員等・内地研究員 …… 75
　H　研究報告 …… 79
　I　個人研究業績 …… 87
　J　図　書 …… 109
　K　資　料 …… 113
Ⅴ　東洋学文献センター …… 115

I 沿　革

本研究所は昭和16年11月26日，東洋文化の総合的研究を目的として，東京（帝国）大学に設置創設された。当初は哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の3部門で，総合図書館内に研究室，書庫，事務室を置いて発足した。昭和24年，新たに3部門が増設されたのを機会に組織を細分化し，哲学・宗教部門，文学・言語部門，歴史部門，美術史・考古学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の6部門に再編成した。同時に本拠を文京区大塚町の外務省所管の旧東方文化学院の一部に移し，これまでの総合図書館内研究室を分室とし，研究の発展をはかった。

ついで昭和26年，人文地理学部門と文化人類学部門が加えられたが，アジア諸地域の基礎的研究の重要性が増大するに判い，地域区分を軸とした将来計画のもとで，従来の諸科学の専門体系による部門構成を，汎アジア経済部門・汎アジア人文地理学部門・汎アジア文化人類学部門，東アジア政治・法律部門，東アジア歴史部門，東アジア美術史・考古学部門，東アジア哲学・宗教部門，東アジア文学部門の8部門に再編成し，さらに地域部門の増設計画を立てた。そして昭和35年には南アジア政治・経済部門，昭和39年には東北アジア部門，昭和43年には西アジア歴史・文化部門，昭和48年には東南アジア経済・社会部門，昭和53年には西アジア政治・経済部門が増設されて，ようやく13部門を擁するに至った。

なお昭和41年には，東洋学に対する文献・情報の収集と国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として，東洋学文献セ

ンターが付属施設として設置された。

本研究所の研究者は各々の専門に従った独自の課題のもとに研究活動を進めながら，しかし各専門分野の孤立を避け，アジア諸地域の総合的研究を推進するという所期の目的を達成するために，合同の研究会，各種研究班によって学際的研究を育て，また研究陣容の補強を図るため，学内外の専門研究者に研究を委嘱し，協力を求める方針をとってきた。

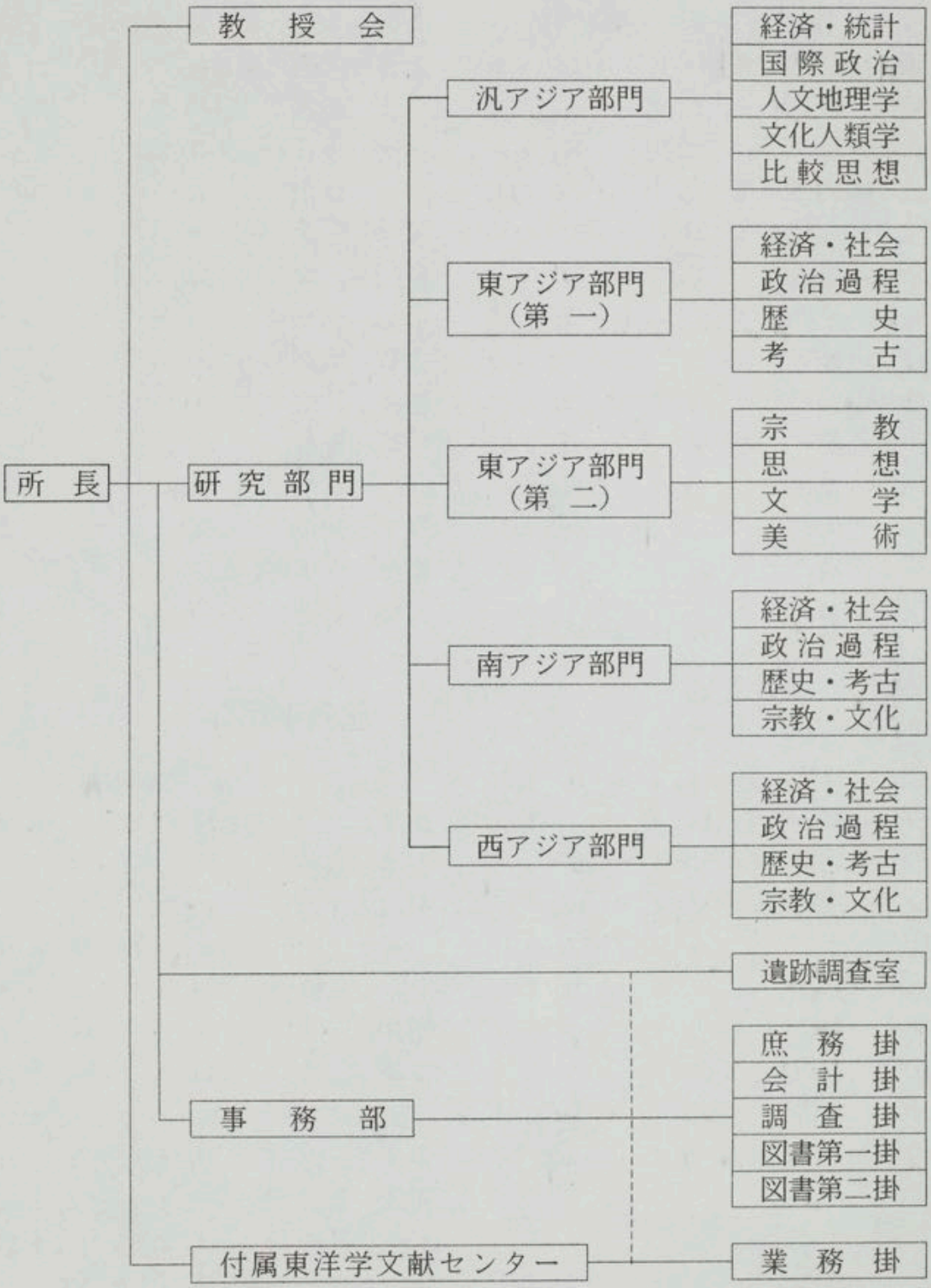
しかしながら，アジア諸地域全体が世界史的転換期に入った今日，本研究所が，わが国のアジア研究の中枢的，指導的役割を果たすために，研究内容の充実，規模の拡大を含む組織上の再編成をおこなうことが必要となった。そこで，昭和56年より新しい構想にもとづくいわゆる大部門制を採用し，これまでの13部門を，汎アジア部門，東アジア部門，南アジア部門，西アジア部門の４部門に統合し再出発することになった。

創立以来23年にわたって，本研究所は総合図書館内研究室や外務省所管の建物に仮住いの状態のままであったが，昭和39年に，本郷構内に建物を新築する計画が具体化した。昭和39年から昭和42年にかけて工事がおこなわれて総合研究資料館との合同庁舎が完成し，５階以上を本研究所が使用することになった。

しかし，研究組織の拡充，研究活動の多様化，図書・資料の増加などに伴い，狭隘な施設の改善，とくに書庫の緊急設備等の強い要望があり，昭和52年から施設設備の必要性を強調してきた。昭和57年に至ってこれが認められ，総合研究資料館との交換分合により，本研究所が合同庁舎を全館使用することになった。これに伴って全面的に改修工事を行ない，昭和59年３月に工事が完了した。

本研究所の総面積は6,577平方メートルで，地下１階，地上８階からなる。３階までを所長室，事務室，図書室，東洋学文献センター，会議室，演習室等とし，４階以上は各研究部門の研究室である。なお地階から８階まで（２階を除く）の北西部分（約1,800平方メートル）は書庫にあてられている。

Ⅱ 組　織


所長
教授会
研究部門
汎アジア部門
経済・統計
国際政治
人文地理学
文化人類学
比較思想
東アジア部門（第一）
経済・社会
政治過程
歴史
考古
東アジア部門（第二）
宗教
思想
文学
美術
南アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
西アジア部門
経済・社会
政治過程
歴史・考古
宗教・文化
遺跡調査室
事務部
庶務掛
会計掛
調査掛
図書第一掛
図書第二掛
付属東洋学文献センター
業務掛

歴代所長

氏　名	在職期間
桑田　芳蔵	昭和16.11.26－18. 3.31
宇野　円空	18. 4. 1－21.10. 5
戸田　貞三	21.10. 6－22. 9.30
辻　直四郎	22.10. 1－29. 3.31
仁井田　陞	29. 4. 1－33. 7.10
飯塚　浩二	33. 7.11－35. 7. 9
結城　令聞	35. 7.10－37. 7. 9
江上　波夫	37. 7.10－39. 7. 9
飯塚　浩二	39. 7.10－40. 2.28
小口　偉一	43. 3. 1－41. 3.31
川野　重任	41. 4. 1－43. 3.31
小口　偉一	43. 4. 1－45. 3.31
泉　靖一	45. 4. 1－45.11.15
川野　重任（事務取扱）	45.11.16－45.12.17
鈴木　敬	45.12.18－47. 3.31
荒　松雄	47. 4. 1－48. 3.31
窪　徳忠	48. 4. 1－49. 3.31
佐伯　有一	49. 4. 1－51. 3.31
大野　盛雄	51. 4. 1－53. 3.31
深井　晋司	48. 4. 1－49. 3.31
中根　千枝	55. 4. 1－57. 3.31
大野　盛雄	57. 4. 1－59. 3.31
尾上　兼英	59. 4. 1－61. 3.31
山崎　利男	61. 4. 1－63. 3.31
斯波　義信	63. 4. 1－平2.3.31
池田　温	平成 2. 4. 1－現在

名誉教授（現在）

氏　名	称号授与年月日
米澤　嘉圃	昭和42. 5
江上　波夫	42. 5
川野　重任	47. 5
窪　徳忠	49. 5
鈴木　敬	56. 5
荒松　雄	57. 5
佐伯　有一	58. 5
大野　盛雄	60. 5
松井　透	62. 5
中根　千枝	62. 5
関　寛治	62. 5
尾上　兼英	63. 5
鎌田　茂雄	63. 5
山崎　利男	平成 2. 5

歴代事務長

氏　名	在職期間
山高　力三	昭和16.11.27－17. 9.30
根本　喜蔵	17.10. 1－19. 7. 9
長内太郎吉	19. 7.10－29. 7.15
工藤松之助	29. 7.16－38.10.31
宮本　健	38.11. 1－44. 2.28
新井　康次	44. 3. 1－49. 3.31
斎藤　益	49. 4. 1－52. 6.30
三浦　晧守	52. 7. 1－56. 3.31
伊東秀三郎	56. 4. 1－58. 3.31
岡部　藤男	58. 4. 1－61. 3.31
木内　義一	61. 4. 1－平2.3.31
江澤　兵治	平成 2. 4. 1－現在

Ⅲ 職　員

所長 池田　温

汎アジア部門

山田三郎	教授（707室）
原　洋之介	教授（611室）
猪口　孝	教授（702室）
田中明彦	助教授（610室）
友杉　孝	教授（703室）
関本照夫	助教授（712室）
福嶋真人	助手（709室）
岡本サエ（兼）	教授（607室）

東アジア部門（第一）

斯波義信	教授（403室）
濱下武志	教授（411室）
小島　毅	助手（413室）
池田　温	教授（402室）
宮嶌博史	助教授（410室）
川村　康	助手（412室）
松丸道雄	教授（407室）
高嶋謙一	教授（408室）

東アジア部門（第二）

蜂屋邦夫	教授（502室）
丘山　新	助教授（508室）
田仲一成	教授（511室）
丸尾常喜	教授（503室）
山之内正彦	助手（512室）
戸田禎佑	教授（507室）
小川裕充	助教授（510室）
林　秀薇	助手（513室）

Ⅲ 職　　員

南アジア部門

加納啓良	助教授（608室）
柳澤　悠	教　授（603室）
上村勝彦	教　授（602室）
小倉　泰	助　手（612室）

西アジア部門

板垣雄三	教　授（811室）
鈴木　董	助教授（803室）
松谷敏雄	教　授（807室）
羽田　正	助教授（810室）
後藤　明	教　授（808室）
鎌田　繁	助教授（802室）
林　佳世子	助　手（813室）

遺跡調査室

古山　学	技　官
千代延恵正	技　官

事務部

事務長	江澤兵治
総務主任	増田仁吾

庶務掛

掛　長	堀内　勉
事務官	益子一郎
事務官	齋藤英二

会計掛

掛　長	齋藤良雄
主　任	岡　徹
事務官	瀬見千恵子
事務官	常田信彦
技　官	丸山　勉

調査掛

主　　任　木村源蔵
主　　任　結城剛吉

図書第一掛

掛　　長　中村隆治
事務官　芳賀満子
事務官　長野　真
事務官　新居弥生

図書第二掛

掛　　長　佐多正子
事務官　笠井伊里
事務官　山口　淳

東洋学文献センター

センター長(併)
池田　温
センター主任（併）
戸田禎佑
教　　授　岡本サエ

業務掛長　中里富三男
事務官　畦浦美矢子
事務官　神田百合枝
事務官　渋谷義治

〔職員数〕（平成2年4月1日現在）

教　授	19名	助教授	9名	助　手	7名
研究担当	32名	研究協力	114名		
事務官	22名	技　官	3名		

〔昭和63年4月～平成元年5月　教職員の異動等〕

（教官）

昭和63. 5. 1	教　授	戸田　禎佑	東洋学文献センター教授併任
63. 7. 1	助教授	猪口　孝	教授（汎アジア部門）に昇任
63. 9. 1	助教授	原　洋之介	教授（汎アジア部門）に昇任
63. 9. 1	助教授	濱下　武志	教授（東アジア部門（第一））に昇任
63. 9. 1		高嶋　謙一	助教授（東アジア部門（第一））に採用
平成元. 3.31	助　手	藤原　千春	退職
元. 3.31	助　手	土佐　弘之	退職
元. 4. 1		羽田　正	助教授（西アジア部門）に採用
元. 4. 1		小倉　泰	助手（南アジア部門）に採用
元. 4. 1	教　授	戸田　禎佑	東洋学文献センター教授併任

Ⅲ 職　　員

元. 4. 1	助教授	柳澤　悠	教授（南アジア部門）に昇任
元. 4. 1	助教授	上村　勝彦	教授（南アジア部門）に昇任
元.10. 1	助　手	黒木　英充	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助手に転任
元.11. 1	助教授	高嶋　謙一	教授（東アジア部門（第一））に昇任
平成 2. 3.31	教　授	山崎　利男	停年退職（南アジア部門）
2. 4. 1	教　授	池田　温	所長に併任
2. 4. 1		岡本　サエ	教授（東洋学文献センター）に昇任
2. 4. 1		丸尾　常喜	教授（東アジア部門（第二））に昇任
2. 4. 1		田中　明彦	助教授（汎アジア部門）に配置換
2. 4. 1		丘山　新	助教授（東アジア部門（第二））に採用
2. 4. 1	助　手	吉田　純	名古屋大学講師に昇任
2. 4. 1		川村　康	助手（東アジア部門（第一））に採用
2. 4. 1		林　秀　薇	助手（東アジア部門（第二））に採用
2. 5.15	元教授	山崎　利男	名誉教授の称号授与

（事務官）

平成元. 5. 1	庶務掛長	道鎮　正雄	工学部建築学科事務主任に配置換
元. 5. 1	理学部庶務掛長	堀内　勉	庶務掛長に配置換
元. 8. 1	庶務掛	安冨　博	医学部附属病院分院職員掛主任に昇任
元. 8. 1	医学部附属病院分院職員掛	齋藤　英二	庶務掛に配置換
元.10.31	図書第二掛	吉澤　秀彦	辞職
平成 2. 3.31	事務長	木内　義一	定年退職
2. 3.31	庶務掛	林　八重子	定年退職
2. 4. 1	庶務部広報企画課長	江澤　兵治	事務長に配置換
2. 4. 1	図書第二掛長	松山　靖夫	図書館情報管理課和書目録情報掛長に配置換
2. 4. 1	薬学部図書掛	佐多　正子	図書第二掛長に昇任
2. 4. 1	調査掛	結城　剛吉	調査掛研究協力主任に昇任
2. 4. 1	会計掛	高野　哲郎	宇宙科学研究所管理部契約課契約第一係主任に昇任
2. 4. 1		常田　信彦	会計掛に採用

Ⅳ　研究活動

A　部門研究

汎アジア部門

関本　照夫　　福嶋　真人　　山田　三郎
原　洋之介　　猪口　　孝
田中　明彦(平成２年度より)　友杉　　孝
岡本　サエ(平成２年度より)

汎アジア部門はアジアという対象を，文化人類学・経済学・政治学・人文地理学という社会科学の個別専門分野の理論と方法に深く関わりながら研究を深化させている。この部門では日本も重要な研究対象としている。

文化人類学研究分野は，アジア諸地域の社会・文化の比較研究を目的とし，ミクロな地域社会の日常生活をフィールドワークの方法でつぶさに明らかにする方法を主に用いて，下からあるいは周縁から，よりマクロな社会の全体像を見透そうとしている。

関本は，インドネシアでの現地調査にもとづき，村落社会を律する社会関係の特質，さらに権威やヒエラルキーを支える観念と行為の特質を明らかにせんとしてきた。現在はさらに，東南アジア諸地域の政治体系と文化との係わりを，過去の王権と現代の国民国家の両面から研究している。

福嶋は，同じくインドネシアでの調査にもとづき，制度的中心に対立するイスラムの運動や農民の抵抗運動を研究し，言語秩序と政治的・宗教的ヒエ

ラルキーとの係わりを追求している。

経済・統計研究分野は，アジア諸国経済発展の実証的な比較研究をおこなっており，この研究を通じて，アジア諸国経済発展のアジア域内及び世界における国際的位置づけを明かにするとともに，欧米で提起・展開された経済発展論の再検討を試みている。

山田は，特にアジア諸国農業発展の比較分析を行っており，生産性・生産構造等の変化の実証分析を通じて，ヨーロッパその他の農業発展との対比の中で，国際的視野からアジアの農業発展についての分析を進めている。

原は，東南アジアに重点をおいて研究を進めており，同地域諸国における国民経済の形成を，タイ・インドネシア・フィリピン・ビルマの比較研究を通じて分析し，更に，東アジアや南アジアとの比較により，アジア経済の中での東南アジア経済の位置と特徴を明かにするべく研究を進めている。

国際政治研究分野はアジアの国際政治の実証的・理論的な研究を精力的に行なっている。

猪口は，国際も国内も，政治も経済も総合した視点で日本を中心とした主として東アジアの国内・国際政治の研究を行ってきている。第一に，日本の対外政策を中心としたもので，英文書 *The Political Economy of Japan: The Changing International Context* (Stanford University Press, 1988, coedited with Daniel Okimoto)を刊行した。

第二に，東アジアの国家と社会の比較研究である。その理論枠組みとして『国家と社会』(「現代政治学叢書」の第1巻でもある）を1988年に刊行した。中国版は1989年に経済日報出版社から刊行された。中間報告は「比較政治体制論—東アジアと日本」として政治学学術誌『レヴァイアサン』1988年秋季号で特集発表した。さらに，『現代日本の国家と社会』の刊行を「東アジアの国家と社会」叢書（全6巻，東京大学出版会）として準備を進めている。

田中は，世界システム全体の動向と関連で東アジアの国際政治を研究してきている。第一に，世界システム全体の変化を理論的に検討しており，これ

まで政治と経済の関係を中心に研究を進めてきたが，今後は，とりわけ政治・経済の変化と技術および思想の変化がどのように関連しているかを重点に研究を進める予定である。第二に，現代の東アジアにおける主要国間の国際政治を理論的・実証的に分析している。重点は，日米中三国間の政治・経済関係にいかなる政治的パターンが存在するかの検討であり，日中関係および日米関係に関しては幾つかの試論敵研究を行った。

人文地理学研究分野はアジア諸地域の記述，フィールド・ワークに基づく社会の全体像を描く。このような作業によって，あまりにも合理的なあるいは機能的な現代世界の相対化を目指す。したがって，狭く人文地理の枠に限定されることなく，むしろ広く隣接諸科学に関与する，脱領域の研究であ。人文地理においては，限定された分野の精細な分析的研究は，同時に広く社会の全体像に収斂せねばならない。

友杉は，これまで行ってきたタイ農村社会の研究にくわえて，スリランカの一地方都市ゴールについて記述しつつある。都市景観を手がかりにして，商業，社会統合，祭祀などが未分化のまま，あるいは相互に複雑に関与してつくる多様な意味の世界と現実世界の統一的な描写がもとめられている。このようなゴールの記述はこの都市の歴史的個性の把握の試みでもある。ゴールでの試みをふまえて，ヨーロッパ都市の研究蓄積を参照しつつ，アジア諸都市の都市比較類型論が志向される。

比較思想研究分野は東アジアの思想交流の中にみられる，漢字文化圏の諸民族の思惟的特徴を研究する。

岡本は，17世紀の中国人の時代精神を調べる。異民族王朝による思想統制のパターンと「禁書」の全体像，中西文化交流の実態，中国内部の地域情報差等を枠組とし，比較思想の視角から上記の構造的解明をめざす。

東アジア部門（第一）

松丸　道雄　　高嶋　謙一（昭和63年９月より）
池田　　温　　斯波　義信　　濱下　武志
小島　　毅　　川村　　康（平成２年度より）
宮嶌　博史

東アジア第一部門は，中国，朝鮮，日本，ときにはベトナムを含む東アジア世界を総体として取り上げ，社会科学，歴史科学的方法によって過去から現在に至る動態を適確に把握することを目標とする。この研究では，とくに東アジア第二部門と協力して，学際的な地域研究による生きた全体像の把握をめざすことはいうまでもない。研究分野としては，経済，社会，政治過程，歴史，考古を包含し，「東アジアにおける国家権力と社会経済構造」を研究課題として，共同研究を継続している。この部門では，「殷周時代の文物とその社会構造」「甲骨文の総合的研究」「東アジア前近代官僚制の研究」「中国宋代の政治経済過程」「17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究」「朝鮮における社会変動と民衆」の６つの研究班を組織し，本学内外の協力を得て継続して研究をすすめている。

時代順に述べれば，考古学，古代史学の分野では，松丸は，本研究所蔵の甲骨資料の整理分析を行い，甲骨を綴合の分類し，2,103片の写真と拓本を『甲骨文字　図版編』として刊行し，その釈文の作成と研究にあたっている。また国内外の殷周青銅器を実物について調査し，近年までに蒐集した金文の写真資料のうち殷・西周のものの分類目録を刊行した。これらの基礎的作業を通じて，甲骨・金文の解釈や偽作問題につき新見解を発表し，その成果にもとづいて殷周時代の国家・社会構造や精神構造を考究している。

高嶋は，歴史言語学的観点より殷・周時代の言語及び文化構造の究明を志し，その側面として甲骨文に於ける否定詞や繫辞などの体系的解釈に努力してきた。文化的側面としては，殷代の「卜い」の際に用いられた言語の性質

について論考を著した。また，早期古典漢語にも重点を置き，周代の青銅器銘文（金文）を中心とした比較研究を試みている。

池田は，中国古代・中世史と東アジア前近代の文化交流史を研究し，唐代に至る現存籍帳を集めて検討考察し，『中国古代籍帳研究』を刊行した。また班研究の成果として「東洋文化」に東亜古代国制試探を特集し，他方，仁井田陞『唐令拾遺』の補訂のため編纂の作業を進めている。なお，笹山晴生を代表とする『続日本紀』の注釈の共同研究にも中国文献との関連の面から協力している。

斯波は，宋元明中国の社会経済史並びに地域社会史の研究を進めており，『宋代江南経済史の研究』を刊行した。華人移住史に関しては，長崎・函館・香港・台湾・オーストラリアなどの現地調査をも行った。その成果の一部に『函館華僑関係資料集』などがある。また，都市史の分野では，都鄙構造を究明すべく，1930年代の寧波地区の詳細な諸統計を分析した。

小島は，皇帝制秩序が維持された思想的基盤を宋代を中心に研究している。具体的には「天」に関する言説やこれに関連する「郊祀」儀礼を分析し，宋学の政治論などにおいて，王朝の統合原理がどのように理論化されていたかを解明すべく努力している。また，宋代福建社会の発展と宋学の該地方における展開との相関について研究を進めている。

川村は，中国法制史を専攻し，宋代を中心として研究を進めている。とくに家族法領域では判語史料の分析を通じて，成文法史料からだけでは解明しえない現実の法慣行の探究に努め，刑罰法領域では唐律的五刑と，杖刑を中心とした宋代の刑罰体系との関係およびその移行の過程，ならびに宋代における律の役割の解明を課題としている。

濱下は，19世紀を中心とする中国と欧米の経済関係の研究に従事し，海関資料・領事報告・中外の商工会議所報告などにもとづき，貿易および金融問題の研究を進め『中国近代経済史研究―清末海関財政と開港場市場圏―』を刊行した。これに関連して，華人資本の海外活動の究明のため，香港・シン

ガポールなどで金融機関・商会の現地調査を実施した。また『仁井田陞博士輯北京工商ギルド資料集』を共編したほか，本研究所蔵の清代・民国初期地主文書の整理分析作業を継続して行っている。

宮嶌は，朝鮮近代史を専攻し，土地調査事業を中心とした社会経済史の研究を進めている。土地調査事業を前後して国家の土地把握方式がどのように変化したのかを，各種土地台帳の分析を通じて追求し，その成果を研究所の紀要別冊として刊行する準備を進めている。また，韓国の研究者と協力して，植民地期の水利組合関係の資料の発掘・分析にも努力している。

東アジア部門（第二）

蜂屋　邦夫　　丘山　　新（平成２年度より）
吉田　　純（平成元年度まで）　　田仲　一成
丸尾　常喜（平成２年度より）　　山之内正彦
戸田　禎佑　　小川　裕充
林　秀　薇（平成２年度より）

東アジア第二部門は，中国を中心とする東アジア地域の思想，宗教，美術を研究対象とする部門で，とくに「庶民文化の形成と展開」を研究課題として，各分野にわたって綜合的に研究することを目的としている。

一般的に中国では，権力エリートと文化エリートは分離せずに癒着しており，したがって権力エリートは文化を独占して，庶民は非文化的階層とみなされてきた。庶民は文化の獲得の努力を繰り返して行い，権力エリートの文化とは異質な「庶民文化」を生み出した。それは非正統的な文化とみなされ，同時に強く意識されなかったにせよ，そこには反権力的な指向をもっていた。これは中国文化のひとつの特質といえようが，その状況はかなり複雑

である。「庶民文化」は六朝期から唐末までに形成され，宋元以後にはめざましく発展し各地方に広がっていたと考えられる。この課題に対して，各研究分野で独自の問題の検討を通じて考究し，共同して中国文化の特質の解明をめざしている。以下各分野の研究について述べる。

宗教・思想研究分野では，蜂屋は，六朝隋唐期を中心として儒仏道三教の思想とその間の交渉を研究している。思想の内在的理解のため文献の正確な読解に努めながら，とくに東晋時代の思想を検討した。また，本学内外の専門家の参加をえて，『儀禮疏』の研究を推進し，「士冠疏」3巻「士昏疏」3巻の訳注を完成しこれを刊行した。さらに全真教など道教の思想について考察し，現地における実情の研究にも着手して，陝西省・四川省における道教の現状について，報告書『中国道教の現状——道士・道協・道観』（本文冊・図版冊）を刊行した。

丘山は，中国における仏教経典の翻訳とその受容に関する研究をすすめている。翻訳については，サンスクリット本・パーリ本・チベット訳と対照し，漢訳仏典の語彙・語法的特徴を解明しつつある。また，各経典と中国の時代思潮との関わりという視点から，中国における仏典受容の特異性を明かにしようとしている。

吉田は，清代の学術・思想史を研究している。人物研究を詳細におこない，さらにその蓄積によってこの時代の学術・思想史の総体の内実を把握しようと努めており，現在までに閻若璩，朱彝尊，紀昀，段玉裁，崔述等の人々について考察・論述を行った。また88年度には道教の実情の現地調査にも参加した。

次に文学の分野では，古来，稗官小説流として蔑視された民間文学はエリートの正統文学に対立して存在していたが，六朝期以後，説話・歌謡などのジャンルを分岐させつつ，権力批判的指向の強い文学を形成していた。この流れは唐宋以後，質的には正統文学をむしろ凌ぐ勢いで，戯曲・小説を展開させ，近世初期から近代に至る。文学研究分野ではこの展開過程を考察す

ることを課題としている。

田仲は，中国の地方演劇史を研究し，宋元より明清に至る地方演劇の記録を詳細に調べ，中国の祭祀演劇の歴史を構成しようとしている。とくにこの数年来，香港，台湾，シンガポール，マレーシアなどに見られる華南（閩粤）系演劇の調査を連続しておこない，文献資料との関連を考察している。また閩粤社会全体に視野を広げる必要から，他分野の専門家の協力を得て『華南の地域社会と地方文学』について綜合的な検討を試みている。

丸尾は，中国現代文学を研究し，とくに魯迅における個と民族の連関に着目しつつ，その文学および思想の形成・展開の跡を通時的に追究する一方で，個別的な作品論を積み重ねているが，近年はその文学に表れる「鬼」の表象に注目し，魯迅文学における伝統と近代の接触点の内在的な解明をこころみている。ほかに中国小説の歴史的考察をすすめている。

山之内は，李商隠を中心として中国晩唐詩人の抒情の構造を時代的背景との関連に注目しつつ研究している。また，所外の学徒とともに，唐詩に現われる植物関係語彙の採集・分析を行なっている。

美術研究分野では，長年にわたって国内や欧米など諸外国に現存する中国絵画を調査し，その写真史料を蒐集してきた。それらの目録と図録とを既に刊行したので，現在はその補足調査を継続している。また，既に刊行済みの上記作品目録をデータ・ベース化して，個々の作品の画像処理をも含めた中国絵画研究資料システムを構築する準備を進めている。戸田・小川・林の三名は，これらの基礎的作業を共同して行う一方，戸田は，宋元の羅漢十王図を中心とする仏画と元代道釈画とを研究し，小川は，唐宋時代から元代の山水画を主な研究対象としている。また，林は，宋元時代の水墨系の道釈画の系統的分類を行いつつ，宋元絵画に表われた庶民的要素の意義を人物画・山水画の両面から考察している。

南アジア部門

山崎　利男（平成元年度まで）
竹中　千春（昭和63年度まで）　　柳澤　　悠
加納　啓良　　土佐　弘之（昭和63年度まで）
上村　勝彦　　小倉　　泰（平成元年度より）

南アジア部門は，東南アジア諸国からインド亜大陸までの地域を研究の対象とする。その地域は多様な言語と文化をもつ人びとが複雑な社会を形成したうえ，欧米諸国による植民地支配のもとでの苦い経験を経て，戦後にあいついで独立した諸国からなる地域であるので，今日の事情を理解するのは決して容易なことではない。この理解のため，本部門は政治，経済，社会，文化などにわたって過去現在の両者を綜合的に研究している。

本部門では，とくに「南アジアの伝統と社会変動および民衆意識」を課題として研究を進めてきた。このため，所外の研究者の協力を得て研究班を組織し，それぞれ新しい角度から問題を提起し，それについて実証的かつ理論的に検討を行っている。

政治・法律研究分野では，山崎は，イギリスのインド植民地支配のもとでの法制度の樹立・発展について研究している。この研究は，イギリス側の立法経過，およびインド社会事情とインド人法律家・民族運動家などの対応を検討して，従来の法制史を再検討しようとするものである。またイギリス政府保管文書集を主たる資料としてインド・パキスタン分離独立の法的側面を考察し，独立後のインド憲法とヒンドゥー法の歴史についても独立前の問題と関連して考察している。

竹中は，イギリス支配下の植民地インドに特有の政治体制と，それに代わるべき独立インドの新体制構築をにらんだ，さまざまな政治集団・運動の連合および競合としてのナショナリズムに注目して，インド政治のダイナミックスを分析した。さらに，第二次大戦直後の英領インドにおける「権力移

譲」という「非植民地化」の政治過程についての研究をまとめた。

経済研究分野では，柳澤は，19世紀以降の南インド農村について，地税関係公文書を分析するほか，南インドの一つの郡の約60の村落台帳を電算機を使って分析し，19世紀後半から20世紀前半にかけてのこの地域のカースト関係と土地保有関係の変容について，構造的に把握しようと試みた。また，南アジアの都市形成の研究の一環として，南インドの手織業史料の分析と現地調査を行った。

東南アジアに関しては，加納は，インドネシアの経済を研究し，昭和62～63年度に現地で実施したジャワ農村の土地所有，農業労働，労働移動等に関する再調査の成果を整理，分析するとともに，オランダとインドネシアの双方で収集した資料により，19世紀以降のインドネシアの経済史の研究をも進めている。

土佐は，権威主義体制の制度化と崩壊という問題関心から，特にインドネシアの学生運動，武力分離運動についての研究成果をまとめるとともに，より広い比較政治社会学的視点から，東南アジアを含む太平洋諸地域の政治的民主化に関する研究をも進めた。

宗教・文化の分野では，上村は，アビナヴァグプタのラサ（美的経験）の理論に関する研究論文を発表した。詩論書の研究を続けるとともに，カウティリヤの実利論を継承した後代の政治論書，『カーマンダキー・ニーティラーサ』，『シュクラ・ニーティ』などを研究し，コンピュータに入力する作業を行っている。

小倉は，ヒンドゥー寺院建築の象徴性の問題をテーマとして，特に南インドの寺院に関して研究を行っている。一方で，祭式の綱要書であるアーガマ文献群に記述された儀礼に注目して，寺院を建築する行為の背景にある宗教的意味について考察するとともに，建築職人の手引き書であるヴァーストゥシャーストラと呼ばれる文献群の規定がいかなる程度まで実際の建築に適用されたかについて，設計技法を中心に分析している。

西アジア部門

板垣　雄三　　鈴木　　董
黒木　英充（平成元年９月まで）
松谷　敏雄
羽田　　正（平成元年度より）
後藤　　明　　鎌田　　繁　　林　佳世子

西アジア部門は，アフガニスタンからトルコ・エジプトまでの地域，いわゆる中近東を研究対象とし，あわせて内陸アジアをも対象のなかに包含する。この地域の遠い過去から現在に及ぶ複雑な文化と社会を学際的研究によって把握することが本部門の目標である。

西アジア地域は，古代文明の発祥の地として，またその後の長い歴史過程における東西文化交流の結節点として，世界史上に重要な位置を占めてきた。同時に，世界の三大宗教と呼ばれるキリスト教，ユダヤ教，イスラム教などが生まれた地である。とくにイスラム教はこの地域を根幹とし，広く諸地域に滲透して多大な影響を及ぼしている。したがって，現在の世界の政治，経済，社会，文化にかかわる多角的な諸問題は，国際的見地からみても，とりわけ西アジア地域に集約的に現れているのである。本部門は以上の諸問題をいくつかの専門分野で共同に研究を推進している。

経済・政治の分野には，板垣，鈴木が所属し，黒木が平成元年９月まで所属していた。板垣は，アラブ近代史に関して従来おこなってきた研究を踏まえつつ，現代中東の政治・社会変動の機構を解明しようとする作業に従事してきた。そこでは，政治過程に作用する当該地域諸社会の集団編成原理ならびに価値意識の変化を重視し，また国際関係と社会過程との間の構造的連関に着目しながら，パレスティナの大衆運動，イスラム復興運動などの展開，リビアの政治動向などについて考察している。なお，文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」の領域代表者として研究プロジェクトを

総括してきた。

鈴木は，オスマン帝国史を専攻し，政治学的視点から帝国の政治・社会体制を研究した。とくに前近代における高級官人の変遷過程を分析して，軍事・行政制度と高級官人を輩出する階層の変容の実態を明らかにするとともに，実務官人層の出現とその役割を論じた。また国際政治学の視点から，現代西アジアにおけるアイデンティティの変容と国際紛争について若干の考察を行っている。さらに，オスマン帝国の帝都イスタンブルの政治社会史的位置づけについて考察した。

黒木は，東アラブ地域，中でもレバノン，シリアの地域を対象にして，近代における社会変動の問題を研究している。この複合的構成の地域社会において，今日見られるような紛争がいかにして生起していたかを明らかにすべく，アレッポを一つの例にとりながら政治・社会史的視点から分析を進めた。

次に，歴史・考古の分野には松谷と羽田が所属している。松谷は，西アジアにおける農耕・牧畜という食料生産経済の開始に関して研究をしている。これは，昭和31年より本研究所が主宰してきた「東京大学イラク・イラン遺跡調査団」の現地研究を引き継ぐものであり，両国における発掘調査をふまえ，近年の国際情勢の変化に伴ない，イラクに隣接するシリアにフィールドを移し，実証的に考究しようとするものである。

羽田は，イスラム期イラン史において，トルコ・モンゴル系遊牧部族が果たした役割に注目し，彼らのイラン社会に与えた影響を分析してきた。また，政治・社会・文化の三方向から前近代イラン・イスラム世界の特徴を明らかにし，これをイスラム世界史の中に正しく位置付けることを試みている。

宗教・文化の分野には，後藤，鎌田，林が所属している。後藤は，従来行ってきたムハンマド伝の研究およびムハンマド時代のアラブ社会・文化の研究をふまえて，それを発展させ，一方でイスラームの思想の枠組みが形成

されてきた過程を歴史的に分析を試みた。また，７世紀メッカを例にとりながら「イスラム自由都市論」の構築を試みてきた。

鎌田は，イスラムの宗教思想研究に携わりイスラムの伝統的思想家の思索の枠組を把握しその特質を明らかにすることを目指して，イラン・シーア派（十二イマーム派）の神秘主義的哲学者モッラー・サドラーの霊魂観及び世界観を明らかにしようと努めている。また，平成元年度は日本学術振興会の派遣研究員として，エジプトのカイロで現代イスラム思想の体系的把握につとめた。

林は，イスラム都市社会史を専攻し，オスマン朝期のイスタンブルを対象として，その社会構造に関する研究を行っている。とくにワクフの問題に着目し，関連史料の基礎的研究を行うとともに，イスラム都市形成に果たしたワクフ制度の役割について考察を進めている。さらに，平成元年12月より10ヶ月の予定で，文部省在外研究員としてカイロとイスタンブルに滞在し，都市の社会構造についての実施調査と関連の文献調査を行っている。

B　平成元年度研究計画

〔部門研究〕

汎アジア部門　アジア諸地域における社会・文化の変容過程

Ⅰ．アジア諸社会の固有文化とその変容

1．関本　照夫　インドネシア社会の統合過程

2．福嶋　真人　東南アジアにおける言語・権力・宗教の研究

Ⅱ．アジア諸国経済発展の比較研究

3．山田　三郎　アジア農業発展の国際比較

4．原　洋之介　アジア諸国の工業化と国際貿易

Ⅲ．アジアにおける政治変動と国際関係

5．猪口　孝　西太平洋諸国における政治経済変動と対外政策

Ⅳ．アジアにおける都市と農村

6．友杉　孝　日本とタイとスリランカの比較研究

東アジア部門

Ⅰ．東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1．松丸　道雄　中国古代国家の形成

2．高嶋　謙一　殷周時代の言語構造と文化構造

3．池田　温　東アジア前近代国制の比較史

4．小島　毅　唐宋時代の皇帝制秩序

5．斯波　義信　宋元時代の社会経済構造

6．濱下　武志　中国近代の経済発展

7．宮嶌　博史　近代朝鮮の社会経済構造

Ⅱ．東南アジアにおける庶民文化の形成と展開

8．蜂屋　邦夫　　庶民における三教思想の受容

9．吉田　　純　　明清の儒学

10．田仲　一成　　明清の地方劇

11．戸田　禎佑　　宋元の民間画工

12．小川　裕充　　明清の職業画家

南アジア部門　　南アジアにおける支配体制と社会構造

1．上村　勝彦　　古代インドの文学と社会

2．山崎　利男　　古代インド社会の変貌

3．小倉　　泰　　中世インド寺院と社会

4．柳澤　　悠　　近現代インドの経済構造

5．加納　啓良　　インドネシアにおける植民地支配と農業問題

6．山田　三郎　　東南アジア農業社会の比較研究

7．原　洋之介　　東南アジアの支配体制と経済発展

西アジア部門　　西アジア文化の歴史的形成と現代的課題

1．板垣　雄三　　イスラム国家論

2．鈴木　　董　　オスマン帝国の政治社会史的研究

3．黒木　英充　　近代西アジア都市史の研究

4．松谷　敏雄　　北シリアにおける農耕・牧畜の起源について

5．羽田　　正　　イラン社会とトルコ・モンゴル系遊牧民

6．後藤　　明　　初期イスラム社会史

7．鎌田　　繁　　イスラム神秘思想の構造と展開

8．林　佳世子　　オスマン朝都市研究

〔班研究〕

アジア諸社会における国家と伝統的政治体系　主任　関　本

1．関本　照夫　インドネシアの伝統的国家と政治体系
2．川崎　有三　マレーシア国家と中国人社会
3．富沢　寿勇　マレー世界の伝統的王権
4．田村　克己　ビルマ国家と伝統的政治体系
5．伊藤　亜人　朝鮮における国家と王室
6．船曳　建夫　オセアニア島嶼国家と伝統的政治体系
7．福嶋　真人　インドネシアにおける国家と農民
8．山下　晋司　インドネシアにおける国民国家と辺境
9．三尾　裕子　台湾漢人に見る中華と辺境

アジア農村の現地研究の方法と過程　主任　友　杉

1．宮口　侗廸　山村の構造―日本―
2．友杉　　孝　むらと水利―タイ―
3．堀井　健三　米作農村と土地所有―マレーシア―
4．茨口　善美　村落と農業―インド，バングラデシュ―
5．中村　尚司　共同体と水利―スリランカ―
6．後藤　　晃　灌漑農業論―西アジア―

構造調整下のアジア経済の展望　主任　山　田

1．山田　三郎　構造調整と経済発展
2．原　洋之介　構造調整と国際経済
3．杉本　義行　構造調整と国際貿易
4．今岡日出紀　構造調整とマクロ経済
5．藤田　夏樹　構造調整と産業構造

6．新谷　正彦　　構造調整と技術変化
7．永田　　信　　構造調整と資源保全
8．福井　清一　　構造調整と農村経済
9．石田　正昭　　構造調整と農業成長

東アジア・東南アジア政治体制比較　　主任　猪　口

1．猪口　　孝　　東アジア・東南アジア政治体制比較
2．徳田　教之　　中国の政治構造
3．石井　　明　　中国の内政と外交
4．国分　良成　　中国の政治過程
5．若林　正丈　　台湾の社会と政治
6．古田　元夫　　ベトナムの民族と政治
7．白石　昌也　　ベトナムの国家と社会
8．小此木政夫　　朝鮮半島の政治外交過程
9．伊豆見　元　　韓国の政治過程
10．土佐　弘之　　フィリピンの経済と社会
11．デービッド・ラプキン　　日本の対外的役割と日本政治体制の性格

植民地体制と農業の商業化　　主任　柳　澤

1．濱下　武志　　中国
2．宮嶌　博史　　朝鮮
3．加納　啓良　　インドネシア
4．原　洋之介　　タイ・マレーシア
5．柳澤　　悠　　インド
6．友杉　　孝　　スリランカ
7．加藤　　博　　エジプト

殷周時代の文物とその社会構造　　主任　松　丸

1．松丸　道雄　　殷周青銅器の製作事情とその国家構造
2．持井　康孝　　窖蔵青銅器から見た殷周時代の社会構造
3．飯島　武次　　殷周時代の玉器と青銅器との関わり
4．量　　博満　　倣銅土器製作の社会的背景
5．平勢　隆郎　　殷文化と楚文化
6．谷　　豊信　　殷周文化と東北古代文化

甲骨文の総合的研究　　主任　高　嶋

1．高嶋　謙一　　甲骨文の言語構造
2．豊田　　久　　甲骨文から見た王権の性格
3．武者　　章　　甲骨文から見た殷代の官制
4．石田　千秋　　甲骨文から見える祭祀の特質
5．高山　節也　　甲骨文から見える至上神
6．持井　康孝　　甲骨文と殷代王族
7．松丸　道雄　　安陽甲骨と周原甲骨

六朝隋唐思想の総合的研究　　主任　蜂　屋

1．蜂屋　邦夫　　六朝隋唐における儒家思想
2．戸川　芳郎　　経典解釈史からみた六朝義疏
3．影山　輝国　　六朝における経学の展開
4．吉田　　純　　六朝時代の経典解釈学
5．小島　　毅　　唐代の礼思想
6．澤田多喜男　　六朝における道家思想の展開
7．高橋　忠彦　　道教思想の形成過程
8．原田　二郎　　道教思想の中国医学
9．谷中　信一　　六朝における道教思想の展開

10. 丘山　　新　　仏典の翻訳と伝統思想
11. 末木文美士　　六朝隋唐思想に与える仏教思想の影響
12. 菅野　博史　　六朝隋唐思想における仏性思想
13. 松岡　栄志　　六朝隋唐の伝統思想と文学思想
14. 藤本　幸夫　　朝鮮文献よりみた中国伝統思想

東アジア前近代官僚制の研究　　主任　池　田

1．福井　重雅　　漢代官吏登用制度の形成と構造
2．尾形　　勇　　中国古代国家構造と官人支配
3．窪添　慶文　　北朝官僚制の構造
4．池田　　温　　隋唐官人制の構造と特質
5．岡野　　誠　　中国律令と官僚支配
6．小島　　毅　　中国の国家儀礼と政治秩序
7．佐竹　靖彦　　宋元時代の官僚制度
8．斯波　義信　　宋代の行政・財政と社会経済
9．小口　彦太　　中国伝統官僚制の解体
10. 西澤奈津子　　唐日職員令の構造と性格
11. 大津　　透　　日唐財政制度の比較と特質
12. 石上　英一　　日本律令制の形成と展開

中国宋代の政治経済過程　　主任　斯　波

1．斯波　義信　　社会・経済過程
2．小島　　毅　　政治・思想過程
3．溝口　雄三　　政治・思想過程
4．Ｊ.マクダモット　　社会・経済過程
5．妹尾　達彦　　社会・経済過程

Ⅳ 研 究 活 動

華南の地域社会と地方文学　　主任　田　仲

1．田仲　一成　　広東の演劇（粤劇，潮劇，恵劇）
2．濱下　武志　　広東の経済と地域社会
3．片山　　剛　　広東の村落
4．戸倉　英美　　広東の民謡（山歌）と民話
5．西川喜久子　　広東の宗族
6．平山　久雄　　閩粤の言語
7．王　崧　興　　閩粤の習俗
8．大里　浩秋　　閩粤の秘密結社
9．斯波　義信　　閩越発展の地域構造
10．岡本　サエ　　閩浙の文人結社
11．丸山　　昇　　上海・江南の文学的風土
12．大木　　康　　蘇浙の説唱

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究　　主任　濱　下

1．濱下　武志　　17世紀以降東アジア経済の展開―欧米の公私文書分析を含めて―
2．岸本　美緒　　明清期経済の動態と意識の構造
3．上田　　信　　明清契約文書より見た社会関係
4．寺田　浩明　　明清期の契約法慣習の論理
5．臼井佐知子　　清末契約文書の社会経済史的分析
6．リンダ・グローヴ　　民国時代公私文書より見た農村経済
7．久保　　亨　　民国時代公私文書より見た経済構造
8．宮嶌　博史　　朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討　　主任　戸　田

1．戸田　禎佑

2．小川　裕充
3．海老根聡郎
4．嶋田　英誠
5．関口　正之
6．湊　　信幸
7．宮崎　法子

特に専門別の分担を定めず，本年は道釈画に関する検討，調査を重点的に行なう。

朝鮮における社会変動と民衆―李朝期から近代まで―　主任　宮　嶌

1．武田　幸男　李朝後期の身分制とその変動
2．吉田　光男　李朝戸籍を通じてみた社会変動
3．吉野　　誠　李朝後期の国家財政と社会変動
4．山内　弘一　李朝後期の地方財政
5．小川　晴久　ソンビと実学
6．趙　景　達　朝鮮開化派思想
7．康　成　銀　渡日朝鮮人の日本における活動と思想形成
8．梶村　秀樹　1910年代の社会経済変動
9．宮嶌　博史　土地調査事業と農村構造の変動
10．尹　健　次　朝鮮民衆運動における民族意識と国家意識
11．宮田　節子　1920年代の地方支配と府・面協議会
12．並木　真人　植民地期の社会変動と民族運動
13．姜　徳　相　独立運動における社会主義と民族主義

南アジアにおける社会構造と伝統文化　　主任　柳　澤

1．山崎　利男　北インドにおける社会構造と法
2．辛島　　昇　南インドにおける社会構造と文化
3．長崎　暢子　北インドにおける民衆意識と政治的行動
4．水島　　司　南インドにおける社会変動とカースト

5．中里　成章　　ベンガル農村における経済変動と下層民衆
6．柳澤　　悠　　南インド農村における社会変動と下層民衆
7．奥平　龍二　　ビルマの国家と伝統法
8．石井　米雄　　タイの民族形成と伝統文化
9．井東　　猛　　インドネシアの諸国家と伝統文化

インド古代叙事詩の研究　　主任　上　村

1．上村　勝彦　　叙事詩の神話
2．山崎　利男　　叙事詩と古代インドの政治
3．小倉　　泰　　叙事詩と宗教儀礼
4．土田龍太郎　　初期ヴェーダ文献と叙事詩
5．原　　実　　叙事詩の宗教
6．山崎　元一　　叙事詩と古代インドの社会
7．吉岡　司郎　　叙事詩の文献学的研究
8．渡瀬　信之　　叙事詩と法典

南アジアにおける社会変動と民衆意識　　主任　加　納

1．加納　啓良　　インドネシアの社会変動と農村構造
2．土屋　建治　　インドネシアにおける社会変動と民衆意識
3．土佐　弘之　　フィリピン・インドネシアの経済開発と都市民衆
4．古田　元夫　　ベトナムにおける社会階層と民衆意識
5．白石　昌也　　ベトナム農村社会の変動と民族形成
6．友杉　　孝　　タイの社会変動と民衆意識
7．末廣　　昭　　タイにおける資本蓄積と社会階層
8．古賀　正則　　北インドにおける経済変動と下層民衆
9．佐藤　　宏　　北インド米作地帯の経済変動と農民生活
10．竹中　千春　　近代インドの政治と民衆

11. 中村　平次　　インド亜大陸における諸民族形成
12. 山本由美子　　近代インドにおける少数民

アジア都市比較の課題と方法　　主任　友　杉

1．陣内　秀信　　江戸・東京の都市空間の特質
2．斯波　義信　　中国中近世の都市
3．大木　　康　　中国都市と大衆文芸・芸能
4．生田　　滋　　東南アジア前近代における都市の形成と人口移動
5．清水　　展　　フィリピンの都市とフォーク・カトリシズム
6．友杉　　孝　　タイ・スリランカの地方商業都市
7．坂本　　勉　　近代イラン・トルコ都市の比較
8．鈴木　　董　　近世トルコの都市
9．林　佳世子　　中世イスラム都市
10. 黒木　英充　　近代アラブ都市の構造
11. 本村　凌二　　古代地中海都市の特質

近代アジア社会研究の方法的課題　　主任　濱　下

1．宮嶌　博史　　近代アジアの土地変革――方法的探求――
2．濱下　武志　　近代中国とヨーロッパ
3．山崎　利男　　近代アジアにおける法と社会
4．柳澤　　悠　　南アジア農村研究の方法
5．鈴木　　董　　西アジア政治社会史の方法
6．加納　啓良　　東南アジア比較経済史の方法

アジアの宗教制度と儀礼　　主任　山　崎

1．田仲　一成　　道教儀礼と演劇
2．関本　照夫　　ジャワにおける外来宗教と土着主義的統合

3．上村　勝彦　　古代インドの宗教制度と演劇
4．山崎　利男　　ヒンドゥー寺院の財産管理
5．鎌田　　繁　　イスラム宗教儀礼の構造

アジアのイスラム　　主任　板　垣

1．松谷　敏雄　　西アジアの基層文化
2．後藤　　明　　歴史的イスラム国家論
3．小田　淑子　　初期イスラム社会における法
4．中村廣治郎　　中世イスラムと政治
5．佐藤　次高　　イスラム社会経済史研究
6．林　佳世子　　イスラム都市社会の研究
7．黒木　英充　　都市民衆意識とイスラム
8．鎌田　　繁　　イラン伝統文化における宗教思想
9．羽田　　正　　イラン社会とトルコ・モンゴル系遊牧民
10．鈴木　　董　　トルコ・イスラム社会の研究
11．加藤　　博　　近代エジプトの農村社会研究
12．板垣　雄三　　現代のイスラム国家論
13．加納　啓良　　ジャワ農村のイスラム

イスラム史料の総合的研究　　主任　鈴　木

1．坂本　　勉　　イラン・トルコ比較社会史
2．八尾師　誠　　近代イラン史
3．羽田　　正　　前近代イラン・トルコ関係史
4．鈴木　　董　　オスマン史
5．林　佳世子　　前近代オスマン社会史
6．黒木　英充　　近代シリア史
7．加藤　　博　　近代エジプト史

8．私市　正年　　マグレブ史

ダイバー写本コレクションの文献学的研究　　主任　後　藤

1．板垣　雄三
2．小田　淑子
3．鎌田　　繁
4．後藤　　明
5．佐藤　次高
6．杉田　英明
7．中村廣治郎

特に専門別の分担を定めず，本年は写本の網羅的検討を行なう。

平成2年度研究計画

〔部門研究〕

汎アジア部門　　アジア諸地域における社会・文化の変容過程

Ⅰ．アジア諸社会の固有文化とその変容

1．関本　照夫　　インドネシア社会の統合過程

2．福嶋　真人　　東南アジアにおける言語・権力・宗教の研究

Ⅱ．アジア諸国経済発展の比較研究

3．山田　三郎　　アジア農業発展の国際比較

4．原　洋之介　　アジア諸国の工業化と国際貿易

Ⅲ．アジアにおける政治変動と国際関係

5．猪口　　孝　　西太平洋諸国における政治経済変動と国際政治経済

6．田中　明彦　　東アジアをめぐる主要国間の国際政治

Ⅳ．アジアにおける都市と農村

7．友杉　　孝　　日本とタイとスリランカの比較研究

Ⅴ．アジアにおける思想・文化の比較研究

8．岡本　サエ　　東アジアの比較思想

東アジア部門

Ⅰ．東アジアにおける国家権力と社会経済構造

1．松丸　道雄　　中国古代国家の形成

2．高嶋　謙一　　殷周時代の言語構造と文化構造

3．池田　　温　　東アジア前近代国制の比較史

4．小島　　毅　　唐宋時代の皇帝制秩序

5．川村　　康　　唐宋時代の法制度

6．斯波　義信　　宋元時代の社会経済構造

7．濱下　武志　　中国近代の経済発展

8．宮嶌　博史　　近代朝鮮の社会経済構造

Ⅱ．東アジアにおける庶民文化の形成と展開

9．蜂屋　邦夫　　庶民における三教思想の受容

10．丘山　　新　　仏教経典の民衆化

11．田仲　一成　　明清の地方劇

12．丸尾　常喜　　中国近代文学における民衆文化の諸問題

13．山之内正彦　　明清の歌謡

14．戸田　禎佑　　宋元の民間画工

15．小川　裕充　　明清の職業画家

16．林　秀　薇　　宋元の道釈画

南アジア部門　　南アジアにおける支配体制と社会構造

1．上村　勝彦　　古代インドの文学と社会

2．小倉　　泰　　中世インド寺院と社会

3．柳澤　　悠　　近現代インドの経済構造

4．加納　啓良　　インドネシアにおける植民地支配と農業問題
5．山田　三郎　　東南アジア農業社会の比較研究
7．原　洋之介　　東南アジアの支配体制と経済発展

西アジア部門　　西アジア文化の歴史的形成と現代的課題
1．板垣　雄三　　イスラム国家論
2．鈴木　　董　　オスマン帝国の政治社会史的研究
3．松谷　敏雄　　北シリアにおける農耕・牧畜の起源について
4．羽田　　正　　イラン・イスラム世界の成立と発展
5．後藤　　明　　初期イスラム社会史
6．鎌田　　繁　　イスラム神秘思想の構造と展開
7．林　佳世子　　オスマン朝都市研究

〔班研究〕

アジア諸社会における国家と伝統的政治体系　　主任　関　本
1．関本　照夫　　インドネシアの伝統的国家と政治体系
2．川崎　有三　　マレーシア国家と中国人社会
3．富沢　寿勇　　マレー世界の伝統的王権
4．田村　克己　　ビルマ国家と伝統的政治体系
5．伊藤　亜人　　朝鮮における国家と王室
6．船曳　建夫　　オセアニア島嶼国家と伝統的政治体系
7．福嶋　真人　　インドネシアにおける国家と農民
8．山下　晋司　　インドネシアにおける国民国家と辺境
9．三尾　裕子　　台湾漢人に見る中華と辺境

アジア農村の現地研究の方法と過程　　主任　友　杉

1．宮口　侗廸　　山村の構造―日本―
2．友杉　　孝　　むらと水利―タイ―
3．堀井　健三　　米作農村と土地所有―マレーシア―
4．茨口　善美　　村落と農業―インド，バングラデシュ―
5．中村　尚司　　共同体と水利―スリランカ―
6．後藤　　晃　　灌漑農業論―西アジア―

構造調整下のアジア経済の展望　　主任　山　田

1．山田　三郎　　構造調整と経済発展
2．原　洋之介　　構造調整と国際経済
3．杉本　義行　　構造調整と国際貿易
4．今岡日出紀　　構造調整とマクロ経済
5．藤田　夏樹　　構造調整と産業構造
6．新谷　正彦　　構造調整と技術変化
7．永田　　信　　構造調整と資源保全
8．福井　清一　　構造調整と農村経済
9．石田　正昭　　構造調整と農業成長
10．本台　　進　　構造調整と産業組織
11．田島　俊雄　　構造調整と中国経済

東アジアの国家と社会　　主任　猪　口

1．猪口　　孝　　東アジア国家と社会の比較理論枠組
2．徳田　教之　　中国の政治構造
3．石井　　明　　中国の内政と外交
4．国分　良成　　中国の政治過程
5．天児　　慧　　中国の社会変動と政治

6．若林　正丈　　台湾の政治
7．白石　昌也　　ベトナムの国家と社会
8．五島　文雄　　ベトナムの政治指導
9．小此木政夫　　朝鮮半島の政治外交指導
10．鐸木　昌之　　北朝鮮の国家と社会

東アジア・東南アジアをめぐる主要国間の国際政治　　主任　田　中

1．田中　明彦　　米国の対アジア外交
2．猪口　　孝　　日本の対アジア外交
3．山影　　進　　アセアンの国際政治
4．小島　朋之　　中国の対外政策
5．古田　元夫　　ベトナムの民族問題と外交
6．伊豆見　元　　朝鮮半島の国際政治
7．黒柳　米司　　アセアンの内政と外交
8．岩田　賢司　　ソ連の対アジア外交
9．デービッド・ラプキン　　日本の対外的役割と日本政治体制の性格

植民地体制と農業の商業化　　主任　柳　澤

1．濱下　武志　　中国
2．宮嶌　博史　　朝鮮
3．加納　啓良　　インドネシア
4．原　洋之介　　タイ・マレーシア
5．柳澤　　悠　　インド
6．友杉　　孝　　スリランカ
7．加藤　　博　　エジプト

殷周時代の文物とその社会構造　　主任　松　丸

1．松丸　道雄　　殷周青銅器の製作事情とその国家構造
2．持井　康孝　　窖蔵青銅器から見た殷周時代の社会構造
3．飯島　武次　　殷周時代の玉器と青銅器との関わり
4．量　　博満　　倣銅土器製作の社会的背景
5．平勢　隆郎　　殷文化と楚文化
6．谷　　豊信　　殷周文化と東北古代文化

甲骨文の総合的研究　　主任　高　嶋

1．高嶋　謙一　　甲骨文の言語構造
2．豊田　　久　　甲骨文から見た王権の性格
3．武者　　章　　甲骨文から見た殷代の官制
4．持井　康孝　　甲骨文と殷代王族
5．石田　千秋　　甲骨文に見える祭祀の特質
6．高山　節也　　甲骨文に見える至上神
7．松丸　道雄　　安陽甲骨と周原甲骨

六朝隋唐思想の総合的研究　　主任　蜂　屋

1．蜂屋　邦夫　　六朝隋唐における儒家思想
2．影山　輝国　　六朝における経学の展開
3．吉田　　純　　六朝時代の経典解釈学
4．小島　　毅　　唐代の礼思想
5．澤田多喜男　　六朝における道家思想の展開
6．池田　知久　　六朝隋唐における老荘注釈学
7．高橋　忠彦　　道教思想の形成過程
8．原田　二郎　　道教思想の中国医学
9．谷中　信一　　六朝における道教思想の展開

10. 丘山　新　仏典の翻訳と伝統思想
11. 末木文美士　六朝隋唐思想に与えた仏教思想の影響
12. 菅野　博史　六朝隋唐思想における仏性思想
13. 松岡　栄志　六朝隋唐の伝統思想と文学思想
14. 藤本　幸夫　朝鮮文献よりみた中国伝統思想

東アジアにおける仏教経典の受容　主任　丘　山

1．丘山　新　仏典の翻訳論
2．神塚　淑子　漢訳仏典と道教
3．河野　訓　中国における仏典の翻訳史
4．水上　文義　隋唐における漢訳仏典の思想的展開
5．下田　正弘　インドにおける大乗経典の成立史

東アジア前近代官僚制の研究　主任　池　田

1．福井　重雅　漢代の官僚制度と政治思想
2．尾形　勇　中国古代国家構造と官人支配
3．窪添　慶文　北朝官僚制の構造
4．池田　温　隋唐官人制の構造と特質
5．岡野　誠　中国律令と官僚支配
6．小島　毅　中国の国家儀礼と政治秩序
7．川村　康　唐宋時代の法の構造と特質
8．佐竹　靖彦　宋元時代の官僚制度
9．斯波　義信　宋代の行政・財政と社会経済
10. 小口　彦太　中国伝統官僚制の解体
11. 西澤奈津子　唐日職員令の構造と性格
12. 大津　透　日唐財政制度の特質と比較
13. 石上　英一　日本律令制の形成と展開

中国宋代の政治経済過程　　主任　斯　波

1．斯波　義信　　社会・経済過程
2．小島　　毅　　政治・思想過程
3．溝口　雄三　　政治・思想過程
4．J.マクダモット　社会・経済過程
5．妹尾　達彦　　社会・経済過程
6．川村　　康　　政治・法制過程

華南の地域社会と地方文学　　主任　田　仲

1．田仲　一成　　広東の演劇（粤劇，潮劇，恵劇）
2．濱下　武志　　広東の経済と地域社会
3．片山　　剛　　広東の村落
4．戸倉　英美　　広東の民謡（山歌）と民話
5．西川喜久子　　広東の宗族
6．平山　久雄　　閩粤の言語
7．王　崧　興　　閩粤の習俗
8．大里　浩秋　　閩粤の秘密結社
9．斯波　義信　　閩越発展の地域構造
10．岡本　サエ　　閩浙の文人結社
11．丸尾　常喜　　江南の習俗と近代文学
12．山之内正彦　　江南の風物と唐宋の詩詞
13．大木　　康　　江南の説唱
14．松岡　俊裕　　江南の文人

中国一九三〇年代の文学　　主任　丸　尾

1．芦田　　肇　　茅盾と鄭振鐸
2．尾崎　文昭　　三〇年代の北京の文学状況

3．近藤　龍哉　　胡風をめぐる諸問題
4．佐治　俊彦　　三〇年代の演劇
5．坂井　洋史　　巴金とアナキズ運動の周辺
6．鈴木　正夫　　郁達夫とその周辺
7．丸尾　常喜　　新文学と伝統社会
8．丸山　　昇　　晩年の魯迅
9．溝口　雄三　　民国の思想と文学

17世紀以降東アジア公私文書の総合的研究　　主任　濱　下

1．濱下　武志　　17世紀以降東アジア経済の展開―欧米の公私文書分析を含めて―
2．岸本　美緒　　明清期経済の動態と意識の構造
3．上田　　信　　明清契約文書より見た社会関係
4．寺田　浩明　　明清期の契約法慣習の理論
5．臼井佐知子　　清末契約文書の社会経済史的分析
6．リンダ・グローヴ　　民国時代公私文書より見た農村経済
7．久保　　亨　　民国時代公私文書より見た経済構造
8．宮嶌　博史　　朝鮮近代公私文書の社会経済的分析

現存する中国絵画の包括的再検討　　主任　戸　田

1．戸田　禎佑
2．小川　裕充
3．海老根聡郎
4．嶋田　英誠
5．関口　正之
6．湊　　信幸
7．宮崎　法子

特に専門別の分担を定めず，本年はソ連・ヨーロッパ圏に所在する中国画の調査を重点的に行なう。

8．林　秀　薇

朝鮮における社会変動と民衆―李朝期から近代まで―　主任　宮　嶌

1．武田　幸男　　李朝後期の身分制とその変動
2．吉田　光男　　李朝戸籍を通じてみた社会変動
3．吉野　　誠　　李朝後期の国家財政と社会変動
4．山内　弘一　　李朝後期の地方財政
5．小川　晴久　　ソンビと実学
6．趙　景　達　　朝鮮開化派の思想
7．康　成　銀　　渡日朝鮮人の日本における活動と思想形成
8．宮嶌　博史　　土地調査事業と農村構造の変動
9．尹　健　次　　朝鮮民衆運動における民族意識と国家意識
10．宮田　節子　　1920年代の地方支配と府・面協議会
11．並木　真人　　植民地期の社会変動と民族運動
12．姜　徳　相　　独立運動における社会主義と民族主義

インド亜大陸における社会変動と政治構造　　主任　柳　澤

1．辛島　　昇　　南インドにおける社会構造の変動
2．水島　　司　　南インドにおける社会変動とカースト
3．中里　成章　　ベンガル農村における社会変動
4．長崎　暢子　　北インドにおける民衆意識と政治的行動
5．柳澤　　悠　　南インド農村における経済変動と社会構造
6．山本由美子　　近代インドにおける宗教と社会変動
7．中村　平次　　インド亜大陸における諸民族形成
8．古賀　正則　　インド亜大陸からの海外移民と社会変動
9．竹中　千春　　インドの独立と民衆運動
10．佐藤　　宏　　現代インド亜大陸の政治変動

インド古代叙事詩の研究　　主任　上　村

1．上村　勝彦　　叙事詩の神話
2．小倉　　泰　　叙事詩と宗教儀礼
3．土田龍太郎　　初期ヴェーダ文献と叙事詩
4．原　　実　　叙事詩の宗教
5．山崎　元一　　叙事詩と古代インドの社会
6．吉岡　司郎　　叙事詩の文献学的研究
7．渡瀬　信之　　叙事詩と法典
8．横地　優子　　叙事詩とプラーナ
9．高橋　孝信　　タミルの叙事詩

東南アジアの政治経済変動と社会階層　　主任　加　納

1．加納　啓良　　インドネシアの経済開発と農民生活
2．土屋　健治　　インドネシアの国民統合と民衆意識
3．土佐　弘之　　島嶼部東南アジアの政治発展とマイノリティー問題
4．古田　元夫　　ベトナムの社会主義と民衆意識
5．白石　昌也　　ベトナム農村社会の変動と民族形成
6．友杉　　孝　　タイの社会変動と民衆意識
7．末廣　　昭　　タイの資本蓄積史と企業集団の形成

ジャワ農村経済史の比較実証研究　　主任　加　納

1．加納　啓良　　農家センサス調査と歴史的比較
2．田中　　学　　農業生産構造と国際比較
3．水野　広祐　　農業外就業と地域間比較

アジア都市比較の課題と方法　　主任　友　杉

1．陣内　秀信　　江戸・東京の都市空間の特質

2．斯波　義信　　中国中近世の都市
3．妹尾　達彦　　中国中世都市
4．大木　　康　　中国都市と大衆文芸・芸能
5．生田　　滋　　東南アジア前近代における都市の形成と人口移動
6．清水　　展　　フィリピンの都市とフォーク・カトリシズム
7．友杉　　孝　　タイ・スリランカの地方商業都市
8．小倉　　泰　　中世インドの都市
9．羽田　　正　　イランの都市
10．坂本　　勉　　近代イラン・トルコ都市の比較
11．鈴木　　董　　近世トルコの都市
12．林　佳世子　　中世イスラムの都市
13．黒木　英充　　近代アラブ都市の構造
14．本村　凌二　　古代地中海都市の特質

近代アジア社会研究の方法的課題　　主任　濱　下

1．宮嶌　博史　　近代アジアの土地変革―方法的探求―
2．濱下　武志　　近代中国とヨーロッパ
3．柳澤　　悠　　南アジア農村研究の方法
4．鈴木　　董　　西アジア政治社会史の方法
5．加納　啓良　　東南アジア比較経済史の方法

アジアの宗教制度と儀礼　　主任　田　仲

1．田仲　一成　　道教儀礼と演劇
2．関本　照夫　　ジャワにおける外来宗教と土着主義的統合
3．上村　勝彦　　古代インドの宗教制度と演劇
4．鎌田　　繁　　イスラム宗教儀礼の構造

アジアのイスラム　　主任　板　垣

1．松谷　敏雄　　西アジアの基層文化
2．後藤　　明　　歴史的イスラム国家論
3．小田　淑子　　初期イスラム社会における法
4．中村廣治郎　　中世イスラムと政治
5．佐藤　次高　　イスラム社会経済史研究
6．林　佳世子　　イスラム都市社会の研究
7．鎌田　　繁　　イラン伝統文化における宗教思想
8．竹下　政孝　　中世イスラム神秘思想
9．東長　　靖　　イスラム社会神秘思想
10．羽田　　正　　イラン社会とトルコ・モンゴル系遊牧民
11．鈴木　　董　　トルコ・イスラム社会の研究
12．加藤　　博　　近代エジプトの農村社会研究
13．板垣　雄三　　現代のイスラムの国家論
14．加納　啓良　　ジャワ農村のイスラム

イスラム史料の総合的研究　　主任　鈴　木

1．坂本　　勉　　イラン・トルコ比較社会史
2．八尾師　誠　　近代イラン史
3．羽田　　正　　前近代イラン・トルコ関係史
4．鈴木　　董　　オスマン史
5．林　佳世子　　前近代オスマン社会史
6．黒木　英充　　近代シリア史
7．加藤　　博　　近代エジプト史
8．私市　正年　　マグレブ史

Ⅳ 研 究 活 動

ダイバー写本コレクションの文献学的研究　　主任　鎌　田

1．板垣　雄三
2．小田　淑子
3．鎌田　　繁
4．後藤　　明
5．佐藤　次高
6．杉田　英明
7．竹下　政孝
8．東長　　靖
9．中村廣治郎

特に専門別の分担を定めず，本年は写本の網羅的検討を行なう

東洋学文献センター

アジア研究のための基礎資料の収集及びデータ・ベースの製作　主任　岡本

1．岡本　サエ
2．関本　照夫
3．濱下　武志
4．宮嶌　博史
5．戸田　禎佑
6．田仲　一成
7．加納　啓良
8．鈴木　　董
9．羽田　　正

文献センター専門委員会委員等によって構成され，委員相互の協議により，資料収集等に関する重点的課題について研究する。

C　定例研究会

昭和63年度定例研究会

7月14日　（東アジア部門Ⅱ）

報　　告　　部門の研究概況　　戸田禎佑

研究発表　　雪舟(1420-1506)　　戸田禎佑

——東アジアの画家としての——

雪舟の評価は，二つの大きなタイプに分けられる。“画聖雪舟”型と“中国亜流”がそれである。雪舟の四十代半ば以前の履歴，画業には不明なことが多く，少なくとも画家としての雪舟の位置は，その入明（1467－1469）によって確立したとみてよい。従って彼が中国で学んだものの比重は非常に大きく，彼を日本の室町期の画家としてみるより，十五世紀後半，十六世紀初頭の東アジア圏の画家としてとらえる方が適切である。実際の作品に則して考えても，最晩年の傑作“天橋立図”は日本的水墨画として評価されているが，その技法的な系譜は中国の実景描写の伝統によっており，安易に日本的とすべきではない。しかし，実景描写のための特殊技法と一般の山水画法の同一画面内での同居は，雪舟独自のもので，このグラフイックとも呼ぶべき表現は日本的と称してよいのではないか。このように雪舟の画業の評価の根本について再検討の時期にきている。

討　　論　　小川裕充

司　　会　　田仲一成

9月22日　（南アジア部門）

報　　告　　部門の研究概況　　柳澤　悠

研究発表　　「バーサ劇」の成立年代　　上村勝彦

高名な大詩人バーサに帰せられる13の戯曲がケーララで発見されたのは，

1909年以降のことである。文学史においては，これらはカーリダーサ（4－5世紀）に先行する詩人バーサの作品として扱われることが多い。しかし，これらがバーサの真作ではないとする意見も強い。L.D.Barnettはこれらのうち6作品中で祈念されるRājasimhaという王に注目し，これらの戯曲はPāṇḍyaのTēr-marān Rajasiṃha I(C.A.D.675）の治世下に制作されたと推定した。上村は Abhinavagupta（10－11th cen.）を初めとする詩論家たちの証言をもとに，「バーサ」の代表作とされる現存の *Svapnavāsavadatta*の成立年代を検討し，次のように結論する。10世紀後半か11世紀前半に*Svapnavāsadattā*という戯曲がカシミールで知られていた。現存の南インド版*Svapnaa*を含む「バーサ」の劇うち少なくとも6作品は，Cheraの王 Rājasimha（1028－43）の宮廷詩人（単数または複数）によって制作された。

討　論　　山崎利男
司　会　　山崎利男

10月6日　（西アジア部門）

報　告　　部門の研究概況　　鎌田　繁

研究発表　　7世紀のメッカ・メディナ　　後藤　明

イスラーム勃興した7世紀のメッカ・メディナは，部族社会であると理解されてきた。当時のアラビアの住民であるアラブにとって，父系の祖先は自分の名前の一部であり，人格の一部であった。彼らの強烈な系図意識は，しかし，社会集団を形成する基礎ではなかった。歴史資料は，当時の人々の系図を詳しく記すが，系図意識に基ずく血縁集団の存在を叙述してはいない。当時のメッカ・メディナ社会にあった社会集団は，部族，部落，社，組などのような特定の単語によって表示されてはいなかった。いいかえれば，集団は「記号化」されていなかったのである。当時の社会集団はまた，代表者をもたない。メッカという町が特定の個人や機関によって代表されることな

く，また，メッカ内部のいかなる集団も個人や機関によって代表されない。代表者のいない集団とは，加入も脱退も制限されないゆるやかな組織であることを意味している。「記号化されず」，「代表のいない」社会集団を歴史資料のなかからさがしだす努力が，歴史家に課せられている。

討　論　関本照夫
司　会　鈴木　董

11月10日　（汎アジア部門）

報　告　部門の研究概況　関本照夫

研究発表　現代都市バンコクの景観にみられる時の断章　友杉　孝
——貨幣・王権・記憶，あるいは都市の系譜へ——

現在，600万を超える人口の大都市バンコクに，水辺の小集落(Bangkokの語義）のイメージを重ねて，都市の系譜の再構成を試みる。

トンブリ，旧バンコク，新バンコク，膨張する郊外の4地域にバンコク経済史を対応させて，これら4地域にみられる都市景観の歴史的特徴を明らかにする。この対応において，とくに，貨幣，王権，仏教が比較すべき要素として取り上げられる。すなわち，どの地域，時代においても，これら3要素は共通して2社会の基礎を構成する。しかし，具体的な現象の仕方は，時代によりまったく相異する。したがって，3要素が現実化する具体的な景観には，バンコクが経験した多様な経験が刻込まれる。社会発展の根拠地である都市は，同時に，社会が共有する自らの記憶の貯蔵所にもなっているのである。社会が自らのアイデンティティを確かめるのは，過去との関係性，記憶においてであろう。

討　論　原　洋之介
司　会　猪口　孝

12月15日　（東アジア部門Ⅰ）

報　告　部門の研究概況　池田　温

研究発表　原始信仰から古代思想への架橋　松丸道雄

——殷人の「太陽」観と周人の「天」観——

アニミズム，シャーマニズム，トーテミズムなどの語で説明される原始社会の人々の思惟が，どのような経過を辿ることによって，いわゆる“古代思想”にまで発展するのであろうか。両者の間には埋めがたい巨大な空白が存在するように思われる。ここでは中国の場合を例に，殷人のもっていたと考えられる特異な太陽観を橋頭堡として。両者に架橋することはできないか，という点について仮説を提唱してみた。

新石器時代に人々が持っていたと思われる素朴な10個の太陽観が，殷代には国家形成のための基本理念に止揚されたが，その太陽観自身が内包する矛盾によって，殷代後期には王朝自体が自己崩壊し，代った周人がより理知的な「天」観を採用するに至り，古代思想形成の基礎が据えられたのであろうとするのが，その仮説の中心である。

討　論　小島　毅

司　会　池田　温

平成元年度定例研究会

7月13日　（南アジア部門）

報　告　部門の研究概況　加納啓良

研究発表　十九世紀後半のイギリス法学とインド法　山崎利男

1858年以後イギリスのインド支配の再編成のひとつは，法体系の整備である。そのなかで，いわゆる「英印法典」(Anglo-Indian Codes)はインドの事情に合致するかぎりでのイギリス法の法典化であり，判例法主義のイギリス法にとって最も大規模な法典化であった。この時期，イギリスでは法改革・裁判所改革がおこなわれ，それに応じて大学ではじめてイギリス法教育がさかんになり，かれら独自の法学が確立した。その法学者のなかでは，イン

ドの法典化に関与したメインとスティーヴン，大学における法学をきずいたポロックのように，インド法は大きな研究対象となった。かれらは，インドでの法典化の成功によって，イギリス法がローマ法，大陸法に劣らない合理性・体系性をもつことを確認して，判例法に対する法典化のすぐれた点を説き，またかれらの新しい形の法学教科書のなかでインド法を利用した。そのうえ，インドでの法体系の整備によって，イギリスはインドの社会や道徳に永続的なよい効果を与えると自賛し，これをもってイギリスのインド支配の正当性を論理づける根據とした。しかし，今世紀に入ると，インド民族運動の昂揚によって，イギリス法学社のインドに対する関心は急速に衰えた。討論では，インド法が，イギリス法および法学に与えた影響の有無とあり方について質疑応答が行なわれた。

討　論　濱下武志
司　会　柳澤　悠

9月28日　（西アジア部門）

報　告　部門の研究概況　板垣雄三

研究発表　イスラム都市におけるワクフ制度の展開　林　佳世子

報告者は，イスラム社会においてハード，ソフトの両面で都市機能の実現に関わったワクフ制度について，14～15世紀のイスタンブルの事例を取り上げ報告した。

征服後のイスタンブルでは，都市再建のための大規模な建設事業にワクフ制度の枠組みが用いられたほか，都市民の所有する住居，店舗など一般の不動産が随時ワクフ化される傾向にあった。その結果，都市の中心部を形成する商業施設の大半がワクフの賃貸物件となり，経済的な原理と同時に，宗教財としての特殊性を持ちつつ運営されることになった。また，大モスクの建設から蠟燭代の寄進に至るまで，多様な「慈善」内容をもつワクフ寄進行為が重層的に展開したことにより，征服地の都市がイスラム都市としての内容

を備えることになった点が指摘された。

討論では，長期的な展開を考察する必要が指摘され，ワクフ制度と農村の関係などをめぐって質疑応答が行なわれた。

討　論　　斯 波 義 信
司　会　　羽 田　　正

10月12日　（汎アジア部門）

報　告　　部門の研究概況　　山 田 三 郎

研究発表　　社会科学と地域研究　　猪 口　　孝

現代東アジア政治体制の比較研究をしていて，政治学と地域研究の相互肥沃化の必要性を強く感じたことが出発点である。「東アジアの国家と社会」という叢書を企画しつつ，研究を進めているのであるが，その過程で生まれた感想をまとめながら社会科学と地域研究の関係を考えてみたい。地域研究者は概して社会科学の成果を利用しないしそれと融合しようとするよりも，独自の世界を設定しがちなようである。社会科学者は現場を積んだ地域研究や資料を駆使した現代史にややもすれば押されがちである。社会科学と地域研究はもともと目標や方法が違うので，どこまで可能かどうか，よくわからない。しかし，おそらく，もうすこしの交流が事態を改善することはまちがいない。

参　考

猪 口　　孝「東アジア比較政治体制論」『レヴァイアサン』第三号（1988年秋季号），7－32ページ。

討　論　　濱 下 武 志
司　会　　関 本 照 夫

11月30日　（東アジア部門Ⅰ）

報　告　　部門の研究概況　　濱 下 武 志

研究発表　中国古代殷王朝に於ト卜いの言語論について　高嶋謙一

洋の東西を問わず，人間は未来がどう進展するかという問題に対し，「うらない」という方法で関知せんとした。中国古代，それも最初の有史王朝である殷代後期（約1250～1050年 B. C.）では，亀ト・骨ト卜が行なわれ，そこにはうらないの内容を記した契刻が見られる。通常「卜辞」などと言われているのがそれである。

最も一般的な解釈に従えば，卜辞とは「人間が未知のことについて神に問いかけた言葉である」ということが言えよう。このような解釈を単なるtheory，即ち一つの「言語説」と扱うことにし，更に視野を広げてみると，かかる言語説――「卜辞疑問・質問説」と命名――とはその性格を異にした，別の言語説も過去提起されてたことが判明する。「卜辞命亀説」，「修祓・祝禱説」，「予言・宣言説」，「マジック説」，「二元論的マジック説」と呼ぶことが可能なものである。これらの諸説を言語学的観点から検討し，実際の卜辞例の読解を通じて，適不適の論断をしてみると「疑問・質問説」がふさわしいという卜辞の実例を上げることが難しい，という結論に導かれた。一方，他の五説に適応すると思われる卜辞例は検出することが可能であった。

討論では，「予言説」で性格づけられるとされた「王占曰」などで始まる文の「以前」には何があったか，それは疑問・質問とみなくてかまわないのではないのか，などの質疑が出され，議論された。

討　論　松丸道雄
司　会　池田　温

12月14日　（東アジア部門Ⅱ）

報　告　部門の研究概況　蜂屋邦夫

研究発表　『尚書古文疏証』の時代――閻若璩と朱彝尊――吉田　純

現行の『書経』58篇中の25篇は，魏～晋のころ，他書に引用されて残って

いた断片の文章を継ぎ合わせ，さらに創作を交えて造りあげられたもの(=偽作）で，“偽古文”と呼ばれる。清の閻若璩の書いた『尚書古文疏証』は，このことを周到に論証した最初のものである。この論証は，それまで“聖経”としての地位を認められてきた25篇を偽作として排斥するものなので，当時の学術思想界に，相当な反響を呼びおこした。本報告では，まず『書経』の内容を文献としての来歴について略述したのち，上記のような反響の中から，同時代人の朱彝尊の反応を取り上げて，学問の真理・事実の追及と経書・経学の権威との葛藤，という問題に直面した清の初期の学術思想界の模索の姿を概観した。

討論では，中国絵画史における偽作ないし模倣の問題が，報告内容と対比して紹介され，また，中国絵画史においてはそのような模倣がしばしば絵画史発展の新生面を開く役割を果たしてきているが，同様のことが経学史でも見られるかどうかについて，考察を促す旨の示唆等がなされた。

討　論　　小 川 裕 充
司　会　　蜂 屋 邦 夫

平成元年度退官記念最終研究発表会

2年2月22日

山崎利男教授研究略歴紹介　　柳 澤 悠

研究報告　ヒンドゥー法の歴史について　　山 崎 利 男

ヒンドゥー法は，いうまでもなく，インドのヒンドゥー教徒だけに適用される法で，今日ではその範囲は家族法に限られている。1955・56年のヒンドゥー婚姻法，同相續法などの4法律によって，それまでの法は大きく改革され，これに加えてその後の法改革と判例によりますますシャーストラの法から離れてしまった。ヒンドゥーの家族法に関する事件をシャーストラに依拠して裁判するという準則は，イギリス植民地支配のもとで定められたものである。1772年から1833年ごろまでに，ヒンドゥー法はバラモンのパン

ディットとイギリス人の裁判官とによって形成され，その後ロンドンの枢密院の判例により法の理論が精密化されて，シャーストラにない法や法論理もつくられた。こうしてヒンドゥー法は非常に複雑になり，しかも先例拘束の原理により法の進歩が抑えられた。このため，今世紀に入って法改革の叫びがしだいに強くなり，前述の独立後の法改革となったのである。

ダルマ・シャーストラはサンスクリットで書かれた法文献であり，前6世紀ごろから19紀はじめまで断絶することなくバラモンによって作られた。この研究は前世紀以来「インド学」者と法律家によってなされてきたが，その成果のうえに立って，歴史学から考究する余地は大きく残されている。本報告の後半では，バラモンの歴史におけるシャーストラの意義，法と宗教との関係，シャーストラの法規定の裁判規範としての性格，王の立法権，シャーストラと慣習法との関係，さらに7世紀以後の注釈書・綱要書について著者，著作目的，態度といった点について，所見を述べながら今後の研究課題を指摘した。

D　科学研究費・特別事業費による研究

科学研究費補助金〔昭和63・平成元年度〕

○西アジア先史遺跡調査（調査総括）

（国際学術研究・学術調査）（昭和63年度平成元年度）代表者　松谷　敏雄

シリア東北部のハッサケ州の州都ハッサケ市の北20kmにある遺跡テル・カシュカショク２号丘において1987年，88年の2シーズンの発掘調査をおこなった。

この調査結果を報告書にまとめ，1990年度に刊行の予定である。

○中国文化に占める道教の位置と現状についての総合的調査・研究

（国際学術研究・学術調査）（昭和63・平成元年度）代表者　蜂屋　邦夫

1988年９月16日から11月10日にかけ，北京・陝西省（西安・華山・周至・宝鶏）・四川省（梓潼・綿陽・成都・青城山・大邑）・上海をまわり，主要道教機関において調査をおこなった。

二年にわたり中国においておこなった調査を，『中国道教の現状――道士・道協・道観――』と題し，本文冊・図版冊の二分冊の報告書にまとめて発表した。

○ムスリム支配期・英領期における南アジアの都市形成

（国際学術研究・学術調査）（昭和63・平成元年度）代表者　柳澤　　悠

南アジアの都市形成を歴史的多角的に明らかにするために，南アジアのいくつかの都市を対象に，第一次史料の収集と現地での聞取り調査を行った。入手データの一部については検索システムが作られ，又，資料の分析の結果は，『ムスリム支配期・英領期の南アジア都市と社会変動』として刊行され

た。

○東アジアにおける農村祭祀演劇の比較研究
（国際学術研究・学術調査）（平成元年度）代表者　田仲　一成
1989年12月15日から1990年２月13日まで，中国の四川省（成都市，広元県，広漢県），貴州省（銅仁県，安順県），安徽省（歙県，貴池県），江蘇省（南通県）等の各地農村を回り，それぞれの地区の仮面劇，或は祭祀儀礼に伴なう雑技・雑劇等を調査，記録した。

○比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究（総括班）
（重点領域研究）（昭和63・平成元年度）代表者　板垣　雄三
昭和62年に重点領域申請を行い，昭和63年度から３ヵ年計画で発足した研究プロジェクトで，25の研究班に所属する研究分担者は137名にのぼる。中東地域あるいはイスラーム研究者だけではなく，日本，東アジア，東南アジア，南アジア，ヨーロッパ，アフリカ，ラテンアメリカなどの地域を研究対象としている研究者を含み，その専攻分野は，政治学，経済学，社会学，歴史学，哲学，思想，文学，地理学，文化人類学，都市工学，農学，コンピュータ学など多岐にわたる。研究課題はいわゆる都市研究ではなく，それを基礎としながら「都市性」をイスラームを軸に多角的・総合的に解明することで，新しい知のパラダイムの創出をめざしている。東洋文化研究所はこの研究計画を全面的に支援し，計画全体の事務局を所内においている。総括班は研究領域の代表者・板垣雄三が主宰し，各研究班の代表者をメンバーにして構成され，研究プロジェクト全体の企画・調整にあたるとともに，研究成果の出版・配布を一括して行っている。

○比較の手法によるイスラームの都市性の総合的研究
（重点領域研究）（昭和63・平成元年度）代表者　斯波　義信

西アジア，南アジア，東アジアそれぞれにおける商業交易や交通・情報の流れを成り立たせる空間の構造，都市を結節とするネットワークシステムの態様を比較の視点を備えつつ分析した。

○比較都市論の方法

（重点領域研究）（昭和63・平成元年度）代表者　友杉　　孝

個別都市の詳細な実態調査をふまえながら，都市をトータルに認識する方法を検討。都市類型論の可能性について再考しつつある。

○東アジアの発展モデルⅡ：政治と国際関係

（重点領域研究）（昭和63・平成元年度）代表　猪口　　孝

政治・国際関係の理論モデルを担当し，中国，台湾，韓国，北朝鮮，ベトナム，日本の政治体制を比較分析した。その中間的成果は政治学術誌『レヴァイアサン』1988年秋季号に特集「比較政治体制論－東アジアと日本」に発表した。最終的報告を準備中である。

○前近代東方イスラーム世界の都市とその社会

（重点領域研究）（平成元年度）代表者　羽田　　正

前近代イラン地域の都市の特徴を解明すべく，本重点領域研究の他班とも協力しながら，共同研究，研究会等を行った。

○東南アジア・オセアニアにおける国家と国民文化の動態

（総合研究(A)）（昭和63・平成元年度）代表者　関本　照夫

東南アジア・オセアニア地域の新興国家において，新しい国民国家形成のための文化政策が展開し，またマスメディア等を通じ，今までの地方的・種族的文化との相互作用の下に国民的大衆文化が形成されている。15名の研究分担者により，その実態の民族誌的研究と概念・方法論の検討を行なった。

○現代日本の官僚制の政治経済学的研究

（一般研究(B)）（昭和63・平成元年度）代表者　猪口　　孝

現代日本政治経済体制の特質を，歴史的制度的な展開を踏まえて，把握し，さらに公共政策分野ごとに官僚制がどのような役割を果たしているかを理論的実証的に分析する。いずれ成果を発表する予定である。

○グルジア山岳部族の民族と神話

（奨励研究(A)）（平成元年度）代表者　後藤　　明

本研究所の外国人研究員として受け入れた，日本学術振興会外国人特別研究員ケヴィン・トィット（シカゴ大学）の研究を奨励するためのもので，コーカサス地方に住むグルジア人の山地住民と平地住民の歴史と現状について，宗教文化，統治と社会，移動と社会発展の３つの視点から比較研究を行った。

国際シンポジウム開催経費

○イスラムの都市性（平成元年度）代表者　板垣　雄三

重点領域研究「イスラムの都市性」研究グループが中心となり，中近東文化センターの協力をえて，10月22日から28日までの期間に開催された。この国際会議では多角的視座から既成の概念が再検討され，イスラーム研究と都市研究の接合した初めての国際的な総合研究の場となった。

特別事業費による現地研究〔昭和63・平成元年度〕

○板垣　雄三

昭和63年12月20日から昭和64年1月4日に至る期間，エルサレムをベースにしてイスラエル占領地における大衆運動とイスラム復興運動の現状に着目して調査し，またカイロにおいてエジプト社会におけるイスラム復興運動の現状に関する資料収集をおこなった。

○宮嶌　博史

平成元年3月20日から4月18日まで大韓民国におもむき，大韓帝国期（1897～1910年）の社会経済史関係の史料の調査，および農村調査をおこなった。

○山田　三郎

平成2年2月15日から3月23日に至る期間，タイ，ベトナム，インドネシア，フィリピンにおいて，経済開発・構造調整政策に対する，イスラム社会と非イスラム社会における対応の差異に関する比較調査をおこなった。

○濱下　武志

平成2年3月31日から5月10日に至る期間，中華人民共和国，香港，タイ，シンガポールにおもむき，中国と東南アジアとの経済関係史に関する現地調査をおこなった。